

第 27 回東海小児整形外科懇話会

当番幹事：本庄宏司(愛知医科大学)

日時：2012 年 2 月 18 日(土) 14:00~18:00

場所：大正製薬(株)名古屋支店 8 階ホール

一般演題 I 座長：澤田重之

1. 足趾合趾症に対し足底部有茎皮弁を施行した 1 例

東海記念病院整形外科

○日南田博臣

愛知医科大学整形外科

山崎豊弘・澤田重之

症例は 4 歳男児，生下時より右第 3, 4 趾の皮膚性の合趾症を認め，他に明らかな先天異常はみとめず両親が分離を希望され受診。この症例に対し足底部よりの subcutaneous pedicled pentagon flap を行い術後血行障害もなく経過良好であった。この皮弁は 2003 年 Kawabata らにより報告され，足底より皮膚軟部組織を移動し遊離植皮の必要がないという長所がある。今回我々は subcutaneous pedicled pentagon flap を皮膚性の合趾症に対し行い有用であったので若干の文献的考察を加え報告する。

2. Ponseti 法を用いた先天性内反足治療における dynamic supination に関する因子の検討

静岡県立こども病院整形外科

○矢吹さゆみ・滝川一晴・松岡夏子

東京大学医学部付属病院リハビリテーション科

芳賀信彦

Ponseti 法後の dynamic supination (以下 DS) の因子を知る目的で，2005 年から 2009 年の 8 月までに未治療で受診，4 年以上経過した患者 24 名(男 19 名，女 5 名)33 足，両側 15 例，片側 18 例を調査した。平均初診時年齢は生後 22 日。関連因子として Pirani score，矯正回数，外転装具装着時間，変形合併の有無等について，それぞれを Odds 比で検討したので報告する。

3. 当科における先天性股関節脱臼に対するオーバーヘッド牽引療法の治療経験

国立三重病院整形外科

○西山正紀・山田総平

三重県立草の夷リハビリテーションセンター

中野祥子・西村淑子・浦和真佐夫

二井英二

我々は先天性股関節脱臼に対し，リーメンビュージェル法整復不能例や，初診時生後 7 か月以上の場合，オーバーヘッド牽引治療法による整復を行なっている。対象は，平成 17 年 4 月から平成 23 年 7 月までに，三重病院にて OHT 法が開始された 11 例 11 関節(男児 1 例，女児 10 例)である。開始時年齢は 6 か月から 1 歳 7 か月，平均 9 か月。全例に整復が得られ，短期ではあるが，OHT 法の治療成績，治療法について報告する。

4. 大腿骨近位骨切り術における LCP Pediatric Hip Plate の使用経験

あいち小児保健医療総合センター整形外科

○岩田浩志・服部 義・北小路隆彦

大腿骨近位骨切り術における内固定材として LCP Pediatric Hip Plate を使用した 4 例について検討した。対象は麻痺性股関節脱臼が 1 例，Perthes 病が 1 例，先天性股関節脱臼後の遺残性亜脱臼が 1 例，外傷後股関節亜脱臼が 1 例で，男児 2 例・女児 2 例，手術時平均年齢 7.6 歳であった。手術は全例内反骨切り術を行い，Salter 骨盤骨切り術を 2 例に追加した。全例で術後骨切り部の転位はなく強固な固定性が得られている。各症例を検討し，考察を加えて報告する。

5. ダウン症候群に合併した習慣性股関節脱臼に対して大腿骨内反骨切術を行った 1 例

磐田市立総合病院整形外科

○森本祥隆・山崎 薫

浜松医科大学整形外科

星野裕信

ダウン症候群に伴う整形外科的合併症の一つに股関節脱臼がある。今回我々は重度発育遅延に伴うダウン症候群に合併した習慣性股関節脱臼に対して大腿骨内反骨切術を行った 1 例を経験したので報告する。症例は 8 歳男児，7 歳ころより歩行練習を始めたところ，しばしば右股関節の脱臼がみられた。保存加療では脱臼を繰り返すため，大腿骨内反骨切術を行った。術後経過は良好で，現在まで再脱臼はなく，独歩可能である。

【骨系統疾患】 座長：二井英二

6. 骨系統疾患が疑われる難治性尖足変形の 1 例

あいち小児保健医療総合センター整形外科

○長谷川 幸・服部 義・北小路隆彦

岩田浩志

名古屋大学整形外科

鬼頭浩史

症例は 10 歳女児。生下時より両足部変形あり。乳児期にギプス矯正施行。その後両足部尖足変形が進行したため 9 歳時に当院紹介受診。初診時所見は両足部高度尖足変形，多関節拘縮などを認めた。X-p にて長管骨の undertubulation，外反股，両橈骨頭脱臼などを認めた。尖足変形に対して軟部解離術 + Ilizarov 創外固定による矯正を行い現在経過観察中である。骨系統疾患の OPD Spectrum Disorders を疑い，現在遺伝子検査を行っている。

7. 乳児期に発症した hypophosphatasia の予後良好例

名古屋大学整形外科

○松下雅樹・鬼頭浩史・金子浩史

馬淵晃好・三島健一・石黒直樹

乳児型 hypophosphatasia は一般的には予後不良とされているが，長管骨の彎曲を主訴とした 3 例を乳児期に診断した。遺伝子解析を行った 2 症

例は TNSALP の変異を複合ヘテロで有しており、一方のアレルは F310L だった。F310L は予後良好で日本人に比較的保因者が多いことが報告されている。先天性長管骨彎曲症の中に hypophosphatasia の予後良好例が含まれている可能性がある。

8. 骨形成不全症に伴った大腿骨骨幹部骨折の 1 例

愛知医科大学整形外科

○澤田重之・木全則文・佐藤啓二

旭労災病院整形外科

花林昭裕

症例は 9 歳男児で、4 歳時に右大腿骨骨幹部骨折を受傷し創外固定にて治療を施行。5 歳時に骨形成不全症と診断する。その後 6 歳時・9 歳時に左大腿骨骨幹部骨折を受傷し、いずれも MIPO 法を用いて治療。現在、左大腿骨については特に問題ないが、右大腿骨骨幹部骨折治療後の変形が残存しており、5 年経過した現在も改善が乏しく、その影響により約 2 cm の脚長差および軽度跛行を認める。

一般演題Ⅱ 座長：本庄宏司

9. 小児外傷性股関節脱臼骨折の 1 例

愛知医科大学整形外科

○村松由崇・澤田重之・大塚博巳

佐藤啓二

症例は 13 歳男児。バスケットの練習中に相手と交錯し転倒。その後、右股関節痛にて歩行困難となり近医受診し、右股関節脱臼骨折と診断され当院紹介。受傷後 6 時間以内に観血的に脱臼および骨折の整復を行い、現在経過良好である。今回我々は、比較的稀な小児外傷性股関節脱臼骨折の 1 例を経験したので、文献的考察を加え報告する。

10. 色素性乾皮症の 6 歳女児に軽微な外傷で生じた大腿骨骨幹部骨折

浜松赤十字病院整形外科

○荻原弘晃

症例は A 群色素性乾皮症の 6 歳女児。以前より神経症状あり、歩容は不安定であった。1 か月前より誘因無く左大腿部痛が出現した。反復横跳びの際、急に左大腿部痛が増悪して歩行不能となり当院を受診した。左大腿部の変形あり、画像上左大腿骨骨幹部の斜骨折を認めた。大腿骨にはすでに仮骨形成を認めた。血液検査では Ca, P, Vitamin D は正常であった。検討していただきたい項目：骨折の原因、今後の治療について

11. 症例検討：原因不明の股関節痛に対し股関節鏡を施行した 1 例

浜松医科大学整形外科

○古橋弘基・星野裕信・森本祥隆

古橋亮典

症例：9 歳男児。1 年前から右股関節痛が出現。近医にてペルテス病疑いの診断で経過観察となっていたが、改善しないことから当院受診。Xp にて TDD 開大、骨頭の肥大、臼蓋形成不全あり。CT

にて臼蓋に骨性の隆起、MRI にて関節液貯留と臼蓋に骨髄信号変化を認めた。血液検査では炎症反応陰性。関節鏡視下に臼蓋の病変部位の生検、滑膜切除を行った。

討論の要点

① 原疾患および病態について

② 今後の精査および加療の必要性について

12. 入院患者の骨折事例とその対策について～過去 15 年間の事例検討とリスクマネジメント～

愛知県心身障害者コロニー中央病院整形外科

○古橋範雄・伊藤弘紀・門野 泉

心身障害児を抱える病院では、入院患者の骨折は避けられない問題である。当院では年間 0～1 件で推移していたが、平成 21 年度は短期間に 3 件発生した。これに対し、リスクマネジメント部会にて平成 8～21 年度の 15 年間に発生した 22 症例 36 骨折の事例の基礎疾患・受傷部位・機序を調査した。そして骨折の原因を患者および診療・看護体制から検討し、対策を行った。当院の事例の詳細と、予防への取り組みについて報告する。

13. 橈骨頭脱臼を伴った尺骨 acute plastic bowing 7 例の治療経験

愛知医科大学整形外科

○白井 透・木全則文・澤田重之

山崎豊弘・佐藤啓二

旭労災病院整形外科

花林昭裕

本外傷は小児期に生じる外傷であり比較的稀とされている。しかし橈骨頭単独脱臼と診断され、尺骨の bowing が見逃されると将来的に再脱臼を来とし、治療に難渋することがある。今回我々は平成 20 年から 23 年の 4 年間に当院を受診した 16 歳以下の Monteggia 脱臼骨折 14 例中、尺骨の骨折を伴わない症例を 7 例経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

14. 脳性麻痺に対する上肢軟部解離手術の経験

愛知県青い鳥医療福祉センター整形外科

○栗田和洋・岡川敏郎

脳性麻痺児の下肢変形や股関節亜脱臼に対しての軟部解離手術は広く行われており、良好な機能改善効果が報告されているが、上肢の軟部解離手術に関する報告はまだ少ない。今回我々は 2 例の片麻痺型脳性麻痺児・者(12 歳と 19 歳)の上肢変形に対し軟部解離術を行ったところ、良好な機能改善を見たので文献的考察を加え報告する。

15. 先天性橈尺骨癒合症に対する金谷法の経験

名古屋市立大学大学院医学研究科整形外科

○岡本秀貴・和田郁雄・若林健二郎

伊藤錦哉・村瀬熱紀・服部一希

大塚隆信

おにたけ整形外科

堀内 統

愛知県厚生連海南病院整形外科

関谷勇人

当科で行った有茎筋膜脂肪弁移植を用いた分離受動術(金谷法)の治療成績を報告する。症例は 5

例 6 肢で手術時年齢は 5 歳～9 歳，右 3 肢，左 3 肢，前方脱臼 1 肢，後方脱臼 5 肢であった．遠位橈尺関節での平均可動域は 53.8° (国内 66.3° /回外 -12.5°) であった．再癒合は初期の 2 例に生じたが，筋膜脂肪弁の屈側への引き込みを工夫してから再癒合はない．金谷法は従来難治性であった先天性橈尺骨癒合症に非常に有効である．

日整会教育研修講演 座長：本庄宏司
「上肢の先天性奇形」

琉球大学大学院医学研究科整形外科学講座 教授

金谷文則先生

※日整会専門医資格継続単位(認定単位：1 単位)

(認定内容：N-03 小児整形外科疾患，N-10 手関節・手疾患)

(認定番号：11-2934-00)